

道徳こぼれ噺

第一話 啞然とする話！

ある学校の校内研で、教員から「教材を深く読み、その世界に浸ってしまうと今の自分を振り返ることができないので、教材はサラッと読むべきだと指導されました。」という発言がありました。よく話を聞いてみると昨年度、指導主事に指導されたことをこの学校ではずっと実践していたということが分かりました。

これとは別に、道徳の指導教諭が発行している「道徳便り」を読む機会があり、それには下記のような記述がありました。

○教材提示をする前に「本当の友達と親友の違いを見つけてみよう」「本当の正義がこのお話の中にあるかどうか探してみよう」と問うことによって、子どもたちはそのあと何も問わなくても考えることができます。

○板書計画を作って行う「予定調和的な授業」ではなく、子どもたちと創る板書にしてみたらどうでしょうか。

この指導教諭は、板書計画や発問から予想される子どもたちの発言を予め考えることを否定し、授業の中で出てきた子どもの発言を次々に板書することによって子どもたちが授業に主体的に取り組むようになると主張しています。また、

○「赤おににとって青おにはどんな友達か？」「人間の友達ができた赤おにがあなただったら、どんな気持ちか？」「赤おにはなぜ青おにの手紙を読んで泣いてしまったのか？」「本当の友達とはどんな友達か？」 ← これらの発問によって多面的・多角的な考えを促すことができます…。

毎月出される「道徳便り」が教育委員会を通して全校に配布され、道徳授業の模範例として推進されているのです。
(HH 氏)

第二話 あり得ない話ではないが…

先日、ある先生から「先生、指導案ができたので見ていただけますか？」と依頼がありました。これはこれでよかったのですが、そのあとに「指導書と違った展開になってしまったのですがよろしいでしょうか？」といった言葉が続きました。「指導書は一例ですよ」と答えました。教科書を指導書通りにやればそれでいいといった雰囲気があるのでしょうか…。 (TH 氏)

第三話 巨星 落つ！

ご子息から訃報をいただきました。昨年6月、「道徳授業の名人」と言われた小林陽子先生がご逝去されました。享年 91 歳。コロナ禍中、ひっそりと逝かれたご様子が悔やまれます。

先生を偲び、ここに伝説の道徳授業(E 教材&学習指導案に掲載中)を紹介してご冥福をお祈りいたします。先生、ありがとうございました。安らかにお休みください。

第四話 「型」だけでもの言うな！

道徳の授業は「従来の型(読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習)でなければならない」と言う人と、「従来の型を(問題解決的な学習やテーマ発問、議論する道徳などへ)変えなくてはいけない」と言う人は、「型」だけでもの言うという意味で同類だ。

授業者が道徳科の目標(本時のねらい)の達成を本気で意識し、その達成を目指して考えて作った授業(指導方法)なら、どんな方法だっていいじゃないか。

その指導方法がよかったか、悪かったか、効果的だったか、効果的でなかったかは授業での子どもの学習状況(学ぶ姿)が教えてくれる。だから、授業者は本時の目標(ねらい)をしっかり正視し、子どもに学ぶ努力を続けることが大切なのだ。

これからの授業研究は、もっとも「授業検証」が重視されていかなければならないと思う。

(これに対し、現任教諭、現役校長、OB 諸氏より様々な意見をいただきました。いくつか紹介します。)

A 氏

私はやはり基礎基本が大事だと思います。本校の今の校内研究で、「社会科とは何か」を基礎基本から学んだので、「ああ、そういうことか」と目から鱗が落ちました。そこからどう自分のものにしていくかです。基礎基本がわかると安心感が生まれ、自信が付きます。

本校の先生たちは、授業参観日によく道徳を選びます。ある保護者から「なんでこんなに道徳ばかりなんだ」と教員組合に電話が入ったそうです。それに対して、本校の組合の先生が「みんな自分からやっていることで、誰からも強制されてない」と言い切ってくださいました。その時、私に言ってもらった言葉が「道徳の基礎基本がわかったから自信ももてたし、道徳が楽しくなった」ということです。

私は今、社会科が楽しくなりました。基礎基本がわかったので挑戦したいという気持ちが出てきます。

だけど、「テーマ発問」の授業で成功したと思える授業を見たことがありません。多分それは、「テーマ発問」の型に問題があるというより、テーマ設定が変なのと、その授業で教師が何をねらうかをちゃんと考えていないからだと思いました。口の達者な子がどんどん発言し、ありきたりな建前論でまとめたり、逆に自分で考えようとしなくて大勢の意見に流されていったりする授業を見てそう思います。

どんな指導法であれ、教師が本時のねらいの達成をどこまで本気で意識しているか、児童の実態理解を基に児童とともに考え、児童をどの方向に導こうとしているか、そこが大事なのかなと思います。

後藤先生がよくおっしゃる「どっちに向かって授業をしているのか」だと思います。型でも見た目でもなく、子供と共に考えようとする姿勢が大切なのかなと思います。

私は、これからも子どもにとっても、私にとっても、シンプルで分かりやすい、深い授業を目指していきます！

B 氏

道徳教育の基本を学ぶことで道徳科は何の時間かを理解することができました。

道徳科の時間は、教材を読み取る時間ではなく、教材の登場人物を批評し合う小さな評論家を作る時間でもありません。まして、哲学的に物事を考える時間でもないのです。人としてよりよく生きるための道徳性を養う時間、つまり「今の自分よりも少しでもよりよく生きようとする自分を自ら育てる時間」だと思い、子供たちと一緒に道徳科の時間に臨んで来ました。

私自身、今までは手法(指導法)が先にたち、ねらいがおろそかになる授業を幾度も行ってきました。他の先生の授業を見て「素敵だなあ」と思うと自分も真似してみたいくなる、講師の先生からご指導いただいた方法を試してみたいくなる…。「教材提示では BGM を使ってみよう」「子供の顔を見て教材提示ができるように教材は暗記をしよう」「役割演技を取り入れよう」「相互指名をしてみよう」など。

そんなふうに手法優先で授業を考え、計画し続けて今に至っているように思います。きっとこれからもそうしていくように思います。

しかし、今年度は東京都の公立学校から離れ、様々な手法で自由に授業展開を考えることができる機会をいただきました。どのような授業であっても、道徳科の特質にかなったものでなければ、道徳科の授業ではありません。ですから、道徳科の研究を行うに際し、道徳科の特質にかなった授業になっているかどうかを常に自分で見張り、子供たちの学びの充実を図っていきたいと思います。

多くの先輩方が研究をし、多くの苦労を経て今の道徳があります。私は、巨人（素晴らしい研究実績）の肩に乗り、少しでも先を見ることができるよう、今後も授業実践を重ねていきたいと思います。そして、道徳科の特質にかなった授業になったか、ねらいは達成されたかを児童の学ぶ姿から確かめ、研究の成果としてまとめていきたいと思います。合わせて、道徳科の特質にかなった授業を見極める「目」を研ぎ澄ませていきたいと思います。

C 氏

「守・破・離」という言葉があります。

守もできていないのに何が破だ、何が離だという思いでこれまで実践してきましたし、指導・助言もしてきました。しかし、道徳こぼれ噺の後藤先生の境地にまではまだ行きつかないのが実感です。

本質のことを抜きにして、「やれ、なんだかんだ」と批評する人がいますが、それを見たり、聞いたりしていると、とても悲しくなります。

しかし、先生のように鳥瞰図的なものの見方で考えていく必要があるのですね。そうしないと、端末を使った授業を見るたびに、「これまでの教育研究は一体何だったんだろう」としんみりしてしまいます。

「授業はこうあるべし」という型と、「これはいい授業になる！」というものとを比べることが必須なのだと感じます。

大切なのは、子供にとって「学び」があるのかどうかです。児童の実態を踏まえているのかいないのか、実際の授業の中で児童の「なるほど感」や「わかった感」などの心の動きがあるのかないのか、それらを授業の指標にしたい。そうしないと、学校での指導はすべて AI に置き換えられてしまいます。心理学における意欲や自己調整学習に関する研究成果をもっと踏まえるべきと考えますがいかがでしょうか？

というのも、最近、こんなことがあったからです。

校長室に、6年生が頻繁に訪れるようになってきました。きっかけは、算数に関するいろいろなトピックを紹介してからです。例えば、普段見ているバーコードには、既習で学んだことが生かされていることを一緒に考えながら、見出していきました。その中で出てきた児童からの「わかった！」「えー、すごい！」という言葉が印象に残りました。何かと忙しいにも関わらず、休み時間を割いてまで私の投げかけに応じてくれた児童から、改めて学ばせてもらったひと時でした。久しぶりに、教師としてのやりがいを感じる事ができた次第です。

話は変わりますが、スマホのルート検索機能は本当に素晴らしいと思っています。なぜならば、いくら意図的に示されたコースをたどらなくても、目標に向けた可能性を示してくれるからです。決してだめだしをしません。人間だったら、すぐにだめだししてしまうかもしれません。そういう意味で、「型先ありき」ではないとも感じています。

D 氏

「道徳」に対する見方、考え方は（教師）一人一人各自の考えをもってよい、独自の道徳観をもてばいいと思います。西洋でもインドでも中国でもイスラムでも佛神でも、好きなようにどうぞ。

自分なりの道徳観を確立することは、これからその人が生きていく上で大切だと思います。

しかし、教師として道徳を教えるにあたっては「学習指導要領」に即して指導していかなくてはなりません。そこから外れてはいけません。

「どんな方法だっていいではないか」

はい、学習指導要領でねらっていることが達成できるのであればという条件付です。

でも、そんなことは先人たちがさんざんやってきたことです。「守破離」の離に達するには死に物狂いの修行が求められます。そこまで道徳をやり切っている教師はめったにいない。

そして、「規矩作法 守り尽くして破るとも離るとも 本を忘るな」(利休道歌)です、「本」を忘るな！です。正解は授業における子どもたちの姿にあります

E 氏

新しい指導法を開発していくことは意味のあることで、話し合いの目的を自分のものとして、話し合っただけその糸口を見つけていこうとする方向性に対しても、指導法の開発は面白いとは思っていません。

私は前からずっと申し上げていることですが、今まで積み上げてきたものを全否定する考えは、やはり受け入れることはできません。

まして、学習指導要領の趣旨から外れた新しい道徳など論外です。その他にも、聞いた人がそれぞれ勝手に解釈してしまうカタカナがたくさん並んだ論も、研究としてはいいのだろうけど、そのカタカナ語は学習指導要領の内容の実現にどこがどう関わるのかを示していただかなければ、それは無責任と言うものだと思ってしまう。

今、学校から離れ、多くの先生方と道徳を通して関わっていますが、まだまだ基本を知りたい方がたくさんいらっしゃることを痛感しています。「なんて特活みたいな指導案だろう」と思ったら、教師用指導書通りだったり、分からないから本屋で本を買って勉強しようと思っても、どの本を買ったらよいか分からない。分からないまま買うので、私に言わせると「それを選んじゃったら、ますます分からなくなる」ような本だったりするのです。

今、学校に必要なのは、難しい指導論の応酬ではなく、もっとベーシックな道徳の特質みたいなどころだと感じています。学校が求めるものと自分の研究との両方の感覚を大切に、これからも学んでいきたいと思っています。

F 氏

「新しくないと意味がない」、「前と違うから進歩がある」と平然と言っている方は、一体どこかに向かつて「自己アピール」をしたいのでしょう。

かつて私が勤務した役所の行政マンの中には、そういう人がたくさんいました。そして、みんな偉くなり、出世していきました。

教師の仕事ではどうでしょう？校内研究発表会で新しいことだけを発表しようとする「外向き」発表会が、昔はたくさんありました。そんな学校の先生たちは疲れ果て、子どもたちは荒れていました。

だから、私は校長として、各教師が「自分が教える子どもたちの力を伸ばし、自らの指導力を高める道徳」で校内研究を進めました。そして、多くの講師の先生方から「基礎・基本」を徹底的に、繰り返しご指導いただきました。当時の教員たちはみんな喜んでいました。そして、道徳が好きになった教員がたくさんいます。

今の私の仕事は「教員育成」から「教員養成」に変わりましたが、同じように道徳の「基礎・基本」を繰り返し、徹底的に学生に教えています。

教師は、「基礎・基本」を身に付けた上で、子どもたちの実態に合った、そして教師の個性を加味した指導を工夫していくことが日々の道徳授業では一番大切だと思います。

G氏

授業の型について素晴らしい提言をありがとうございます。

道徳科の教科書が発行されて（も）、読み物資料中心の授業が行われているのが現状のようです。また、新学習指導要領で、問題解決学習や対話的な学習が推奨されているがまだまだのようです。

いずれにしても、多くの指導方法の中から、その時に適切な方法を選んで効果的に進めるという貴兄の考えは、素晴らしいもので、さすがです。このことは道徳科に限らないことです。授業の型には次のようなものが思い浮かびます。

○指導体制（1対1、TT、少人数指導、習熟度別指導） ○学習形態（個人、グループ、全体、縦割り） ○教えて考えさせる、考えさせ追究させる ○問題（課題）発見解決学習 ○役割演技（ロールプレイ） ○体験学習（実演、実験・観察、調査、飼育栽培） ○IT活用指導（パソコン活用、オンライン学習）等々。

目標と指導内容、学習活動、学習環境や子供の実態などに応じて、適切な型を採用するようにしたいものです。

第五話 「本」を忘るな！

「守破離」の離に達するには死に物狂いの修行が求められます。そこまで道徳授業をやり切っている教師はめったにいません。

「規矩(きく)作法 守り尽くして破るとも 離るとても本を忘るな」(利休道歌)

「本」を忘るなです。正解は授業で見せる子どもが学ぶ姿の中にあります。 (RO氏)

第六話 稽古(けいこ)

型がある人が型を破るから“型破り”、型のない人が破れば“型なし”

この言葉に導かれるように十八代目故中村勘三郎は一層稽古に打ち込んだ。

第七話 子どもの心をとらえる道徳授業

先週、隣のクラスで「友の命」の授業をしました。すると今日、そのクラスで1番授業への集中が難しい男の子が、「先生、今週は道徳やらないの？」と声をかけてきました。「今週はやらないよ。」と答えると、「そうか…、またやらないの？」と残念そうな顔…。「先週、たくさん発表してたね。先生、嬉しかったよ。ありがとうね。」と言うと、笑顔で「またやってね。」と言って去って行きました。嬉しかったです。

「教材提示に命をかける！」を続けていると、子供たちは道徳を楽しみにしてくれるようになりました。

「自分の気持ちをたくさん言えて楽しい」、「友達の違う考えを知ることができて面白い」という回答がアンケートの中でたくさんありました。今、30人中28人が道徳の時間に進んで手を挙げて発表します。2人の子も聞くときちんと話せます。「道徳って、すごいな！」って、今しみじみ感じています。(KS氏)

第八話 道徳授業の何が子どもの心に響くのか？

もう30年くらい前になります。新採3年目で、初めて6年生をもった時のことです。

道徳の授業づくりに関心を持ち始めた頃で、副読本以外の資料を使ったり、自分で資料を作ったりして、夢中になって授業をしていました。何の価値についての授業か分からないような授業でしたし、年間指導計画無視の授業でした。でも、授業をするたびに「先生になってよかった！」と実感していました。

卒業文集に35人中10人がメインで道徳授業のことを書き、5人が現在教員をしています。私は15回卒業生を送り出しましたが、そんなことはあの時の1回だけです。当時は若さだけが取り柄で、何の見識も経験もありませんでしたが、熱量とセンスは「神懸っていた」ように思います。その後ずっと、あの時の授業を超えることができないでいます。教師の熱量とセンスが子どもたちの心に響くのだと思います。(HU氏)

第九話 登場人物と子どもたち

道徳授業で使い終わった板書用の場面絵を子どもたちは欲しがります。それで授業後は、大体じゃんけん大会になります。以前は教室に掲示して、今までの道徳の振り返りに利用していました。

今、主に使っている場面絵は教科書会社が販売している挿絵データから印刷したものです。

授業後のじゃんけん大会は、低学年も高学年も同じで、教材によって人気があるものかないものがあります。主人公の絵のかわいさが影響することもあります。やはり教材が子どもたちの心に届いて、授業を「よかった!」、「面白かった!」と感じられたかどうかが一番影響しているようです。

以前2年生を担当していた時に、男の子のランドセルの透明なポケットの枠に主人公がはまるように綺麗に折られて入れられている場面絵を発見したことがありました。「どうしてここに入れたの?」と聞いたら、「家に帰って、お母さんに授業の話をしてこれを見せたら、綺麗に折ってここに入れてくれたんだ。」と嬉しそうに教えてくれました。確か「ぴよんたくんのゴール」だったと思います。ウサギの主人公が必死に走っているイラストです。

毎日、ランドセルを開くとその絵が見えて、この子はどんなことを思うのかな?お母様はどんな思いでここに入れてくださったのかな?と想像しました。

先日、今の5年生で「クマのあたりまえ」をしました。お話やイラストのかわいらしさはありますが、死を扱った生命の尊さで、子どもたちの受け止め方はそれぞれ違い、話し合いも深くなりました。石になってみている絵は一人の男の子しか希望がありませんでした。最後の、お兄ちゃんクマと一緒に森に帰っていく後ろ姿の絵が一番人気でした。その絵をじゃんけんして勝って手にした女の子の表情が嬉しそうで、遠くで見ていた私も嬉しくなりました。

石になってみている絵を選んだ男の子と兄弟で森に帰って行く絵を選んだ女の子、それぞれなぜその絵を希望したのか、その絵を見て何を思うのか、聞いてみたいような、そっとしておきたいような気持です。(MH 氏)

第十話 自己を見つめる学習とICTの活用

本校は校内研究を道徳で行っています。研究推進委員会で、現在の教育課題である ICT を活用した授業作りができないかという議論になりました。ワークシートではなく、PC に打って意見を共有するとか、ポジショニング機能を使って自分の立場をハッキリさせ、その後の変化を見とるなどの意見が出されましたが、結果的にどの分科会もそうした使い方は止めることにしました。

また、市教研道徳部でも同様に、子供たちが自己を見つめ、自己の考えをもつために真に必要な方法を考え、選ぶようにしてきました。(教材提示では ICT を大いに活用しています。)

友達の考えを聞いて、自分の考えを広げたり深めたりすることは大切ですが、まず、しっかり自分と向き合い、自分の考えをもつことの方がもっと大事です。そして、自分の考えを「みんなに伝えたい、みんなに話したい」という気持ちが自発的に高まる時に発信するもので、勝手に画面に出され、オープンにされてしまっただけでは、正直に自己を振り返ることができにくくなると思います。

2年生のうちのクラスは、まだ自発的にみんなに発信し、伝えたいと思う子は多くなく、担任である私の責任を痛感しています。しかし、何も考えようとせず、自己の振り返りを書けずにいた子供たちが、じっと考え、自分と向き合おうとするようになってきました。正直に(素直に)「あいさつをしようとは思わない」と書く子も出てきました。このことは望ましくない反応かもしれませんが、私は「ありのままの自分を見つめ始めた大きな一歩だ。」と感じています。

何にせよ、学級の子供の実態は様々です。その実態に合った手法が取られるべきだと思います。「ICTを使わなければならない」と思い過ぎず、かと言って「使うべきではない」と決めつけず、子供たちが安心して本音が出し合える授業を心がけていきたいと思っています。(MO 氏)

第十一話 道徳的実践力と道徳的実践 !?

給食の配膳をしていた時のことです。列に並んでいた A 君に「先生、来てください。」と言われました。B 君に並ぶ順番を抜かされたことを伝えたかったようです。「順番を抜かされて嫌だったんだね。」と言うと、A 君は「うん。それにこの前、道徳のお話で順番抜かしの話があったでしょ。だからよくないと思って話したの。」と言いました。抜かした B 君も A 君の話を知ると、いけなかったなあという顔になりました。

道徳の話が二人に共有されていて、すぐ納得し合えたのだと思います。

「教えたことをすぐ行為、行動に移せるようにすることが道徳科の授業の目的でない」ことはよく分かっているつもりですが、この時ばかりはとても嬉しい気持ちになりました。(SI 氏)

第十二話 「仲間」と「友達」、そして「親友」

人は人生の中で 30,000 人の人と触れ合います。例えば、お店の店員と会話をしたというレベルを含め、それくらいの人と触れ合うそうです。

その内、3,000 人の人と知り合いになります。名前を覚えるというレベルです。

そして、300 人の人と仲間になります。(私は今、年賀状のやり取りがそれくらいなので、それが仲間の範囲と言えるでしょう。)

そして、30 人と友達になります。今はコロナ禍なので一概に言えませんが、一年間で飲みに行ったり、遊びに行ったりする友達はそれくらい的人数ではないでしょうか。その内の 3 人は親友になるという話です。(33,333 の法則)

「自分には 3 人の親友がいた」と言える人生は幸せな人生だと言えるでしょう。

ところで、道徳科の内容項目 B [友情、信頼] は究極において、30 人の友達を対象にしたものではなく、3 人の親友にフォーカスした指導内容だと私は思っています。(TS 氏)

第十三話 「あっ！」

私には、若い頃に体験した忘れられない道徳授業の思い出があります。

それは「ノートのひこうき」の授業です。この教材は物や金銭を大切にしようとする心を育てるための教材で、2年生の発達段階にとっても合っていてよい教材だと私は思っています。

その日の授業は概ね指導計画通りに進み、授業は終了しました。どの子も満足そうな顔をしていましたし、私も「今日はよい授業ができたな」と手応えを感じていました。

私のすぐ目の前の席は加奈子ちゃんでした。その後ろが千晶ちゃんの席です。この二人は普段からとても仲良しでした。千晶ちゃんが言いました。

「ねえねえ、加奈ちゃん、加奈ちゃん。何か紙くれない？」

すると、加奈子ちゃんは、

「うん、いいわよ。」

と、私の目の前で自分の道徳ノートをビリビリッと破って、「はいっ」と後ろの千晶ちゃんに渡したのです。

それはあまりにも唐突な出来事で、たった今終わったばかりの授業と少しも変わらない光景が私の目の前で展開されたのです。私はただ啞然として眺めるだけでした。

当の加奈子ちゃんは、いかにも「いいことをした！」という満足げな顔で前を向き、埴輪のように固まっている私の顔を見た瞬間、手を口に当てて「あっ！」と言ったのです…。

「人の行為や行動はその人のその時の価値観や気分によって行われることが多く、授業で教えたからといってすぐに実践されるものではない。」

加奈子ちゃんは大好きな千晶ちゃんからの頼みに誠意をもって応えることがその時の彼女の価値観だった訳で、加奈子ちゃんの行為はごく自然な行為だったと言えます。

しかし、もし『ノートのひこうき』の授業をしていなかったら、きっと加奈子ちゃんの『あっ！』はなかったと思います。

加奈子ちゃんは今、どこで54歳の人生を歩んでいるのでしょうか？

今の加奈子ちゃんに会ってみたいような、このままそっとしておきたいような、妙な気持ちで46年前のできことを思い出しています。(TG)

第十四話 自己を見つめる

私は、子どものためになる教育方法を説く講師の方々に日頃から不信感を持っています。

子どもは一人として同じ性格の子はいません。親も同じです。

10人子どもがいれば10通りの育て方があります。親が10人いれば10通り、父と母だと10×10

=100通りの方法があると思います。「子どもはこのように育てた方がいい」と言い切る先生がいたら、その方は何も分かってない方だと私は思っています。私はいつも批判的な目でこういった講義を聞きます。

しかし、後藤先生はお行儀のいい行動を押し付けるのが道徳ではない、道徳とはどういうものかを分かりやすく説明してくださいました。自分の内面や経験してきたこと、これから経験するかもしれないことを見つめることだと教えてくださいました。

そして、ツールの重要性も教えてくださり、すてきなツール「鏡」も見せてくださいました。

道徳の模擬授業では、自分の実体験を思い出したり、人の考えを聞いたりして、とても楽しい時間でした。

後藤先生、貴重な体験をありがとうございました。このイベントを企画して下さった学校にも感謝をお伝えしたいと思います。（道徳授業地区公開講座・5年生 KW の父）

第十五話 いのりの手

私は東京藝術大学受験の時に、デューラーの「祈る手」の模写をしました。あの青みがかったデッサンの一本一本の線をなめるように追いかけて、「どのようにしたらこのような絵が描けるのか」と、どれだけの時間をこの絵の前で費やしたことでしょう…。

知りませんでした!!それがハンスの手だったなんて…、反省です。

絵の裏にある見えない世界を観ること、聞こえない音を聴くこと…、これは普段から私が大切にしている「イメージする力」で道徳と同じこと。あの時、ハンスの手と知って模写をしていたなら、もっと納得のいく絵が描けたのではないかと思いました。

道徳も絵と同じく、見えない、聞こえない世界の「心」の勉強です。あらためてイメージする力の必要性を感じました。

そんな4年2組の授業でしたが、後半に担任の先生が子どもたちに、ご自分の過去の体験を話してくださいました。高校生だったときの自分の心の弱さと、今も続く後輩の方との友情のお話でした。

後ろから参観していましたが、この時の22名の子どもたちの頭はぴたっと止まって、1mmも動きません!全員の心が集中していました。

身近な大人である先生が、上からでなく水平なベクトルで、自分たちと同じ目の高さでご自身を語ってくださることは、子どもたちにとって何よりもインパクトのある学びだと実感した瞬間でした。（道徳授業地区公開講座・学校評価委員）

第十六話 第1回ワクワク道徳授業研修会の参加者の感想（5/28 中野区立令和小学校にて）

「あ」と言う間!

- ・ 道徳の研修会が「あ」という間なんてことはあるのかと思っていましたが、本当にあっという間でした。教材の範読練習のポイントや発問の組み立て方、教材分析の方法もとても勉強になりました。道徳授業地区公開講座があるので、自分で中心発問を考えてやろうと思います。また役割演技をした後の一言も「こういう言い方もあるのか」と目からうろこでした。
- ・ 3時間があつという間でした。初任者として参加し、道徳の授業の基本を少しつかめたような気がします。今すぐできそうなこととして、①教材提示の範読の際には間をとって読むこと、

②指導書に頼らず自分で発問を考えることです。来週から道德の授業をするのが楽しみです。

- ・ あっという間の3時間でした。これまでは道德の授業というと、教科書の教師用指導書を開いて、内容を読んで、教材を作って…、という流れでやってきました。しかし、今回のお話を聞いて、道德授業の作り方や考え方をたくさん学ぶことができました。今後の授業づくりに生かしていきたいと思います。
- ・ 3時間の研修があっという間に過ぎました。今、中堅の立場になり、道德のOJTをする機会が増えました。しかし、私自身まだまだ勉強中です。本日の研修で「若手にここを伝えたい、こんなところなら私にもできそう」と思えることが多くあり、学びになりました。発問の作り方、実践していきたいと思います。間の取り方、修行します。

新たな発見、新たな実感！

- ・ 道德の授業は道德教育（扇）の「要」という話はよく聞きますが、扇の骨の矢印・ベクトルの話は初めて聞きました。これからは赤の矢印を意識して授業をしたいと思います。学習指導案
作成(超)×3 入門、いつも熟読して授業に生かします。
- ・ 教材は自己を見つめる鏡ということを実感しました。授業の前にもっと教材を読み込み(4回)、発問も赤本通りでなく、自分で考えてみようと思いました。ぜひ第2回にも参加して、もっと道德について知りたいと感じました。
- ・ 私は道德の授業にどのようにして子供を引き込むかで悩んでいました。その一つとして、教材提示がとても印象に残りました。今までも心を込めて読もうと思っていましたが、強弱や間でこんなにも引き込まれるものかを実感しました。また発問構成では、本気で考えればこんなにも意見が分かれ、多様な指導プランができることに驚かされました。そして、どれも正解ということも。自分も自分なりに考え、子どもを引き込む道德授業がしたいと思います。
- ・ 道德の指導に悩んでいたところだったので、大変勉強になりました。特に、中心発問の設定では、多様な意見が多く出る場所ではなく、同じような意見が深く出る場所を選び、価値の自覚の深化を図るという言葉に「なるほどな」と思いました。普段、指導書通りに進めなくてはという考えだったので、今後はオリジナルで中心発問、基本発問を考えていきたいと思います。
- ・ 指導書通りに授業をやるが多かったため、今日は本当に勉強になりました。特に、発問づくりについての学びが大きかったです。いつも中心発問を決めかねることが多かったのですが、どのようにして中心発問を決める（作る）かがよく分かりました。また、役割演技も二つ教えていただき、やってみたいと思いました。ぜひまたこのような機会を作っていただけるとありがたいです。
- ・ ぼんやりとしていた道德科の授業づくりがはっきりと分かりました。教わったことをもとに中心発問を見つける力、教材提示の力を磨きたいです。昨日、授業観察でちょうど「友の肖像画」を行いました。昨日とは違う授業がしたくなりました。
- ・ 教材分析をすることで児童の発言が予想でき、発問が精選されることがよく分かりました。私の周りには「議論できる発問が中心発問であるべきだ」という先生が少なくないので、その先生方に「ねらいに合った混じり気のない気持ちで主人公に充満している場面を中心発問にすべきだ」と伝えたいと思います。
- ・ これまで何となく指導書を見ながら考えていた道德授業が間違っていたことに気づき、深く教材研究をすることで「こんなにも楽しい道德授業になるんだ！」と思いました。範読の練習を

たくさんしようと思いました。クラスの子どもたちの顔を思い浮かべながら教材分析をしたり、板書計画を立てたりすることが本当に大切だと分かりました。何よりも、①教材選択、②教材提示、③発問、の優先順位を意識して授業を組み立てていこうと強く思いました。

- ・ 私は 2 年目の新人教師です。今日は本当に私の心がスッキリしました。と同時に、今後道徳授業を行う時は、子どもたちに嫌悪感や罪悪感を抱かないようにしなければというプレッシャーも感じています。初めに後藤先生が「じっくり教材研究をするのは、年に 1 回か 2 回でいい。」とおっしゃったので、あまり自分を追い込まずにやろうとも思っています。
- ・ よい教材を選択し、よい教材提示をすることで授業の 8 割が決まるというお話をいただき、今後は教材選択と教材提示に力を入れていきたいと思えます。また、発問の組み立てには教材分析表を使うと便利で、中心となる人物の気持ちをしっかり分析することでの確な発問になることが分かりました。また、役割演技をすることで登場人物の気持ちをより深く考えることができることも実感しました。本日学んだことを今後の道徳授業に生かし、子供たちが楽しいと思う授業を実践していきたいと思えます。
- ・ 教職経験を重ねてはいますが、道徳についてきちんと勉強できていなかったもので、「いろは」から教えていただき、本当に勉強になりました。教えていただいた中心発問、基本発問の作り方、教材研究の仕方を明日から生かしていきます。とてもとても深い学びとなりました。
- ・ 教材分析の演習では実際に学級の子供の立場に立って主人公の内面を分析しました。「たくさん書けたな」と思う所はやはり発問候補になり、これが児童理解なのかと理解しました。来週の道徳から実践していこうと思えます。

道徳は楽しい！

- ・ 道徳は本当に奥が深く、楽しい教科だと改めて実感しました。何よりも後藤先生が楽しそうにしているところが印象的で、私も来週の道徳の時間を誰よりも（子供よりも）楽しもうと思いました。道徳を推進する立場ですが、分かっていないことも多く、改めて勉強になりました。また是非、参加させてください。
- ・ 「道徳、楽しい！」と思いました。心が動くというのは人間にとって良いエネルギーになるのだと思いました。また、本校の道徳を進めるに当たって何を大切にすればよいかや、子どもの心に響く授業を行うために何を意識すればよいかがよく分かりました。
- ・ 今まで、道徳の具体的なイメージがもてずに悩みながら授業をしていました。本日、先生のお話を聞き、今までモヤモヤしていたものがスッキリした気がします。道徳って楽しいなと思いました。来週からの授業が楽しみでワクワクしています。
- ・ 私は初任で道徳の授業のやり方が分かりませんでした。赤本、指導書通りにやっても「この発問では子供たちにはわからないだろう」と思うことがよくあり、道徳の授業をしていて楽しいと思えませんでした。今日の後藤先生の研修を受けて、赤本、指導書通りではなく、オリジナルで作ることの大切さを学びました。基本を押さえ、教材を深く読み込んで、子供も教師も楽しい授業をしていきます。
- ・ 楽しかったです!! 教材分析の大切さ、教師が惚れた教材を使う、大切にします。子供の反応を想像しながら教材研究する楽しさを教えてもらいました。「発問はピンポイントであるほど分かりやすい、考えやすい」確かにそうです。日々の自分を反省です。初めて道徳の研修会に参加しましたが、本当に楽しかったです。

- ・ 今回の発問づくりの研修、とても楽しかったです。発問構成のタイプでは、私は B タイプ（肉食系）のようですが、リスクもあるということなので、ブレないように教材提示を頑張っていきたいと思います。

来てよかった！

- ・ このような研修会に初めて参加しました。どんなものなのか漠然とした不安はありましたが、実際に活動も多く、明日から実践できるものばかりでした。コロナの影響で研修会が減る中、在職年数だけが過ぎ、何とかしなくてはという焦りもありましたが、とても丁寧で基礎となるところからの内容で嬉しかったです。また、このような機会があれば参加したいと思います。
- ・ 参加して良かったです。草食系の発問構成、肉食系の発問構成がすごく分かりやすかったです。自分の授業は草食系が多かったからマンネリ化していたことに気付きました。発問構成を見直して授業改善していきたいと思いました。また、役割演技の「お話づくり」の学習活動は目からうろこでした。
- ・ 基本発問で取り上げる場面が人によって様々違うので、深いなあと思いました。参考書を読んでもイマイチ分からないところが多く、今日の授業を受けて自分の中でストンと落ちたところが多くあったので、すごく来たかがありました。また、役割演技のテクニックや中心発問の選び方は目からうろこでした。自校に戻って他の教員にも伝えたいと思います。
- ・ 20年も担任していますが、この3時間で学んだことがたくさんあり、土曜の休日を返上してこの研修を受けて本当に良かったです。教師が教材文を読むときに大事なことは「間」!! 私も上手に間をとって読むことができるのですが、上には上がいました！素晴らしいお手本を見せてくださって感謝しています。役割演技も楽しかったです。一人の登場人物の相反する心を2人で言い合うのは初でした。今度是非やってみます。
- ・ 初任者で毎日分からないことだらけでしたが、先生のお話を聞いて道徳科の授業づくりの奥深さや面白さに気付くことができ、ワクワクした気持ちになりました。これからも教員続けたいなと思います。
- ・ 本日の研修会、来て良かったです。今までずっと指導書（赤本）をバイブルにしていました。中心発問の見つけ方、そこに迫る基本発問の見つけ方を学ぶことができ、本当にうれしかったです。ねらいを翻訳することで中心発問が明確に見えてくる作業が本当に自分でもびっくりでした。
- ・ 授業づくりの基本の「き」をしっかり学ぶことができました。発問づくりの手順を実際に体験したことで、体に染み込んでいくようでした。毎時間の道徳を大切に、学級の子どもたちと楽しんで45分間を過ごしたいと思いました。さっそく自宅に戻って教材研究を行いたい気持ちです。参加して本当に良かったです。
- ・ 本研修に参加して本当に良かったと思いました。後藤先生からいろいろな手法や道徳教育に関する基本的な考え方、授業づくりのポイントなど、たくさんのが学べました。また、先生の範読がとても印象的でした。自分一人で教材文を読んだ時と先生の範読を聞いた時とでは、自分の中への入り方が全然違い、びっくりしました。自分も「間」を意識して範読してみたいと思いました。毎週の道徳授業が少し楽しみになりました。
- ・ 私自身、道徳に苦手意識をもっていたので、少しでも授業力を上げたい！道徳のことを知りたい！という思いで参加しました。普段、教材研究の仕方が分からない…という状態だったの

で、教材提示の仕方、場面分けや中心発問の決め方など、全て勉強になりました。授業もワンパターンになっていましたので役割演技のやり方を体験できたことは大変良かったです。やってみよう！実践したい！と思いました。

道徳授業の「いろは」を楽しく学ぶ研修会

わくわく道徳授業

困っている先生、みんな集まれ！



〔日時〕 令和4年5月28日(土) 13:30~16:30 ※受付は 13:00 から

(あっという間の3時間です！)

〔会場〕 中野区立令和小学校 中野区新井4-19-26

(西武新宿線「新井薬師前」駅下車 南口より徒歩5分)

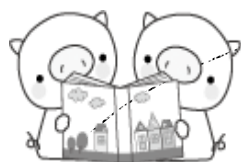
〔内容〕 ワークショップ: 的を射た発問を作る! & 道徳指導の基礎基本

〔講師〕 後藤 忠 (元東京都小学校道徳教育研究会会長、日本道徳科教育学会理事)

〔持ち物〕 学習指導要領解説 特別の教科 道徳編(文科省)、筆記用具

〔参加費〕 1人200円(資料印刷費のみ) *当日「受付」にて!

この研修会はボランティアで行われます



「授業がいつもワンパターンでつまらない」、「指導の効果が実感できない」、「道徳授業が辛い」、「赤本通りに授業が進まない」、「教職員に的確な指導・助言ができない」
…、とお悩みの**初任者**~**管理職**の全ての先生方!
気軽に参加してみませんか?

目から鱗で、きっと来週からの授業が楽しみにになりますよ。



第十八話 かぼちやのつる

「かぼちやのつる」のお話を理解するのは、1年生の子どもにとって少し難しかったという印象をもちました。生活の授業でアサガオを育てているので「つるは伸びるもの」というイメージがあります。ですから、「道にはみ出して伸びることがなぜいけないのか」、「切られても仕方ない(かぼちやに非がある)なんてかぼちやがかawaiiそう」と思う子が多くいて、かぼちやに対する同情論が最後まで尾を引きました。

わが子は「支柱立てればよかったんだよ〜！」と、かぼちやを育てていた人の責任感の欠如が問題だと感じていたようでした。(道徳授業地区公開講座アンケートより・K小1年生の母)

第十九話 道徳授業の二極化に対応せねばと思う日々です

指導教諭の時は発信専門でしたが、退職すると様々な学校の道徳授業地区公開講座などで授業を拝見する機会が増え、学校に何が必要かを考えさせられる日々が続いています。

先生方はみんな忙しく、サボっているわけじゃなく、道徳まで手が回らないのだなと思います。すると「やっぱり教師用指導書の役割は大きい」と思い、自分も携わっていますので責任を痛感しています。講演会や研修会の指導は回りきれませんが、指導書や赤刷りはダイレクトに授業に反映されます。

一方、研究授業を公開する道徳専門の先生は誰も真似できない授業をやるのではなく、明日の授業に取り入れられる授業を見せていく必要があるだろうと思いました。

私の中には道徳専門の方への助言と、そうでない方への助言が二極化しているこの頃です。共通していることは「何のためにその指導法を取り入れるのか？」というキーワードです。道徳科の目標のことなんです…。(HH氏)

第二十話 あの大手出版社、お前もか!?

昔から学校現場でよく利用されている超有名な教育雑誌、そのwebに「みんなの〇〇技術」というのがあり、その中に<リレー連載>明日の授業に生きる!「一枚画像道徳」のススメという記事がありました。読んで朝から衝撃を受けました。

「一枚の写真で一言!」大喜利みたいです。目新しさ、派手さ、奇抜さのメッキ祭…。一見キラキラしているけれど、大事な芯の部分がありません。大手出版社の記事だけに若手が信用し切って真似しそうです。

それにしても、道徳が特別の教科になってから、いろいろな新語が生まれて飛び交い、間違った教科書教材や間違った教師用指導書が学校にはびこり、芯のない軽薄な指導方法が超有名な教育雑誌に載って純粹無垢な若手に広がっていく…。この現実を当事者たちはどう思っているのでしょうか?

(YT氏)

第二十一話 展開例を書いた人の名前を明記すべきだと思います

来年度は教科書採択の年です。

教科書の質を上げることは当然ですが、同時に教師用指導書や赤刷り本の質ももっともって上げていただきたいと思います。多くの学校の多くの先生はそれを頼りに道徳授業を行っている実態があります。無責任な展開例を無責任に載せられては道徳授業が混乱します。その展開例は誰が書いたか、書いた人の名前をきちんと明記すべきだと思います。雑誌などの原稿にはちゃんと執筆者名が書かれているのですから。(KH氏)

第二十二話 これが道徳科の評価なの？

小3の孫の「あゆみ」は国際理解を扱った内容でした。「それぞれの国の考え方があり、良さがあると振り返った」と書いてありました。何を評価したのかさっぱり分かりませんでした。(HS氏)

第二十三話 いくら考えても私には理解できません

内容項目A〔希望と勇気、努力と強い意志〕の教材は「努力が実を結び、夢が叶う話じゃなければ教材にならない」と言う方がいますが、それは違うんじゃないかと私は思います。人間努力すれば必ず夢は叶うという人よりも、どんなに努力しても叶わない夢だってあるという人の方がはるかに私に努力する勇気を与えてくれます。超一流のスポーツ選手やノーベル賞を受賞した学者などを題材にした教材を使うとき、指導に躊躇いを感じる私は変なのでしょうか？ (HH氏)

第二十四話 道徳授業地区公開講座で6年生と一緒に特別授業を受けました

- 初めて参加させていただきました。まず、私自身が一人の人間として特別授業を受けることができた久々の授業体験でした。6年生1人と保護者3人のワンチームでしたが、発問をきっかけに各々がよい空気感でお話ができたと感じます。(4人だともう少しだけ時間があつたらなあと思うくらいでした。) 6年生は一人でしたが、しっかりご自分の意見を言えていたので立派だなあと感じました。後藤先生の導入のお話が分かりやすく、「大好きな友達を思い浮かべて…」と自己紹介し合ったときは、その人もどんな人かがにじみ出ていてとてもよかったです。そして、教材を深く読み解いていくと自分の過去も含めて投影され、いろんな感情が浮かんできました。後藤先生の「道徳は自分を見つめる勉強です」という最初のことばにはっとさせられ、授業を受けることができました。子どもの時の道徳授業も大事ですが、今の時代、老若男女どんな人間にも必要なのではないかと思うくらいとても有意義な授業でした。
- 様々な感情が交差する題材を後藤先生が朗読してくださり、深い視点で解釈する6年生の生徒さん達と意見交換させていただき、大変有意義な時間となりました。
- 人の考えを聞くことで自分の考えが深まり、また自分の考えが人の考えに影響する…日常的に行われていることだけど、人と人とがつながる基本がここにあるなあと改めて勉強させられました。本来、紛争や戦争も対話によって解決できるはずなのだろうけど…、本当にたくさんの方のことを考えさせられた時間となりました。
- 6年生と保護者という立場を取り外して、ロールプレイを通して「友情」について考える素晴らしい時間でした。6年生の生徒さんたちがとても深い考察をしていて驚きました。1年生の親としては5年後の姿が想像できる楽しい時間でした。
- 6年生児童と保護者4人のグループで授業を作っていくワークショップのような授業で、初対面ながらもお互いに協力し合い、語り、演技し、話し合いを繰り返していくうちに次第に打ち解けていきました。今回のテーマは難しいテーマでしたが、どちらの選択をしたとしても、続いていく人生の糧にして、友達の立場に立って考えてみることを怠ることなく友達を大切にしたいと思いました。

第二十五話 その授業のすごさに息をのみました！

先日、東京都墨田区で行われた区の道徳授業研究会に呼ばれ、そこで公開された3年生の授業に私は圧倒されました。授業者は区立両国小学校植木洋主任教諭、内容項目はD〔感動、畏敬の念〕でした。

派手さも奇抜さもなごくシンプルな授業でしたが、児童と教師と教材とが三つ巴になって響き合い、よどみなく「本時のねらい」に向かって展開されていく授業でした。特に圧巻だったのは、展開の前段から展開の後段へのスムーズな移行で、少しのブレもつまずきもありませんでした。(最新記事に学習指導案を掲載中)

よく観察すると、道徳の学習を行う上で極めてベーシックな学習の仕方(守破離の「守」)をすべての児童が(この3ヵ月の間に)ほぼ完璧に身に付けていることが分かりました。これには本当に驚かされました。

(後日、逐語授業記録ができれば掲載します。)

若い先生たちが大勢参観していましたので、「道徳の授業は教師の人間性で行うものです。今日の授業を真似るなら上辺のテクニックではなく、植木先生の授業の心を真似てほしい」と助言しました。(TGOTO)

第二十七話 令和5年度 第4回わくわく道徳授業研修会に参加して

- 私は2年目の教員です。先生が「見ちゃダメ！」と言われた教師用指導書を見ながらテキストに授業をしていました。でも今日、中心発問を考えたり、基本発問を考えたりするのってこんなに楽しいんだ！と思いました。まだ一人だと難しいので、先輩方と「議論」しながら今日みたいに発問を作りたいと思いました。(KE氏)
- 私は教師として4年目…。しかし、道徳の授業づくりには常に不安がありました。(今年研究発表があるにもか

かわらず…。)しかし、今の自分は違います。先生の研修を受けて授業づくりの軸のようなものが分かりました。少し自信をもって授業づくりができそうです。(MH氏)

- 私は教員5年目で学年は単学級です。日々手探りで頑張っていますが、道徳はまったく分からなくて困り果てていたところでした。そこに今回の研修会があり、教材研究がどういうものか、やってみて分かった気がします。月曜日からやってみたくさんがたくさんあります。(SK氏)

第二十八話 思いやりで大事なことは

自分の心と頭で相手の心や頭の中を推測するのではなく、相手の心や頭になり切って考え、その思いと願いに添った言動をとることだ。(恩師 故 内海静雄先生のお言葉)

第二十九話 道徳授業地区公開講座に参加して(S区立S小学校)

- 道徳の授業の重要性を初めて理解しました。年間35回だけでなく、もっと増やした方がよいのではないのでしょうか。(1年生保護者)
- 娘がよく「保育園と違って学校は疲れる」と言っています。今からそんなことを言って、この先どうするんだと思っていましたが、家庭は「家族が心身ともに安らげる場所でありたい」というお話しにとても共感しました。娘にとって我が家が一番安らげる場所であり続けられるようにしていきたいと思いました。(1年生保護者)
- お話しは理想論ではなく、子どもたちへの愛にあふれ、「自分は本当に未熟な母親だ」とはっと立ち止まり、反省するきっかけをもらいました。子どもの心に寄り添える親になれるよう精進します。(3年生保護者)
- 目に見えないもの(心)が人間を支えている大事なものであること、自己の心を見つめる学習が道徳の学習であること、道徳の時間が子どもの成長にとって大切な時間であることがよく分かりました。家庭は心の安定の場でありたいと強く思いました。(5年生保護者)

第三十話 わくわく道徳授業研修会はいわゆる稽古と同じです

わくわく道徳授業研修会はワークショップ型の研修会です。つまり、稽古です。

相撲の稽古、柔道の稽古、剣道の稽古、お習字の稽古、踊りの稽古などと同じく基本を繰り返し修練することで技が磨かれ、オリジナルの実力が身に付いていきます。

「知った」ということと、「身に付けた」ということには天と地ほどの違いがあります。知ったことが身に付くまで、稽古、稽古、稽古あるのみです。

第三十一話 だから道徳なんて信用できないんだ

先日、道徳の研究などとは関係のない教員たちとのちょっとした集まりがありました。教員経験3年目のAさんが「今度教育委員会の訪問があって、道徳をやることになったんだ。手品師だよ。」と言いました。すると、もうすぐ教員経験10年になるBさんが「手品師ってありえないよね。明日のパンにも困るような人が子供のために大劇場の話をするなんてことはあるわけがないよ。一人のお客のためになんて笑っちゃう。そんな話を「自分事として考える」って子供に押し付けようとするから道徳なんて信用できないんだ。」というものでした。もしかしたら、Bさんのように教材を「こんな話あるわけない。ばかばかしい」と決めつけて道徳を遠ざけている人たちが一定数いるのではないかと思ってしまう。研究授業の協議会などで、ずっと居眠りしているような教員はBさんのような考えの人で、初めからよい授業をしようという気もない人に、どうやって指導したらよいでしょうか?教えてください。(HH氏)

第三十二話 日頃の道徳の授業の計画について調べました

本校の学級数は18です。連休に入る前、各学級担任に聞きました。

道徳授業の流れをどのように計画していますか? > (1つ選択)

- A 教師用指導(展開例)を見て、その計画に沿って授業を行っている。…3名
 - B 教師用指導書を参考にし、そこに例示している発問を精選したり、新たに発問を加えたりして行っている。…8名
 - C 教材文を読み、主題やねらいに沿った発問を設定している…3名
 - D インターネットなどで指導案を検索し、それに沿って授業を行っている…2名
 - E その他…2名(「日々の生活からテーマを設定し、そのテーマに合った教材を探して授業を行っている」、「児童の実態から課題を見つけて授業を行っている。」)
- (ET氏)

第三十三話 「第三十一話」に対する Answer!

B先生は道徳科の目標や道徳の「教材」の役割(意義)について深く考えたことがないと思われる。こういう基礎的な認識がないまま、「こんな話あるわけない、ばかばかしい。だから道徳なんて信用できない」と批判し、くだらないと決めつけるのは、誠に軽率で不誠実な態度と言わなければならない、断じて容認できるものではありません。言うまでもなく、道徳科の学習は自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める学習です。その学習は教材の登場人物に自己を投影し、そこに映る自己を見つめることを通して行われます。つまり、教材「手品師」は児童の心を映す鏡ですが、児童に「手品師のようになりなさい」と強要するものであってはならないのです。

手品師の境遇、手品師の夢と努力、男の子との約束、そして友人からの誘い、その間で深く葛藤し、そして決断する…。手品師の身に起こるこうした一連の出来事を一貫して「自分事」として考える、つまり手品師を通して（児童が）自己を見つめる学習に徹するべきです。

あえて言いますが、B先生がこの手品師をどう思おうがそれは勝手です。手品師は人生からの問いかけに悩み、熟慮し、そして断行したまでのことです。この手品師を「自分とは違うから」と侮蔑するのはいかなるものでしょう？それは個人の価値観の違いであって良し悪しは言えませんが、むしろ「お里が知れますよ」と言うことではないでしょうか？

いずれにしても、基礎基本の確かな道徳授業の普及啓発は必要だと痛感しました。（GT）

第三十四話 道徳科の魅力を実感しつつある学生の将来が楽しみです

私は今大学で、学生たちと教材を何度も読み、本時の「ねらい」の設定を議論し、発問構成に迷いながら、よりよい道徳授業づくりを共に学んでいます。

授業時間だけでは終わらず、休日に集まって指導案を検討しているグループもありまして、確実に道徳授業の楽しさを実感している学生が増えていることをとても嬉しく思っています。

道徳教育について卒業論文で取り組む学生、教育実習の研究授業に道徳科を選択した学生たちを支援・指導していますと、「きっとこの子たちは、教師になったら道徳科の魅力を発信してくれるだろうなあ」と明るい気持ちになります。（HH氏）

第三十五話 ちょっとうれしい話です

7月のスクーリングでちょっと嬉しいことがありましたので聞いてください。

通信教育学部はコロナ禍からずっとzoomでの授業が続いていて、私としては大変不満です。画面越しですが、なるべく一人一人に話しかけて集中してもらうように工夫しています。

今回のスクーリングには60人ほどの受講生がいました。

道徳では教材提示が大切であると解説し、実際に教材提示をしたところ、ある学生が「教材提示は脚本をしっかり読み込み、俳優が演じる演劇と同じ感覚ですね。私は最近まで舞台俳優をしていたので、先生の教材提示に心が躍りました。そして道徳科の授業にとっても興味をもちました。教材の世界観に子供たちが浸れるように教材提示を工夫し、また教材分析にも力を入れて子供たちと楽しく授業をしたいと思いました。」と感想を言ってくれました。

通信教育学部には様々な経験をしている学生がいるので、このような視点から感想をいただくと、とても励みになります。（HH氏）

第三十六話 教科担任制と道徳

この学校で道徳の教科担任制が始まったのは、若手教員が体育をやると学級が荒れて仕方がないという理由からでした。学級が荒れると若手教員が辞めてしまうという理由で、どうにかそれを阻止しようとして教科担任制を取り入れました。

私個人としては、複数学級で道徳授業をやることは勉強になっていいのですが、道徳をやっていない担任はどうなのでしょう？ 1月の道徳道徳授業地区公開講座では担任全員がいきなり道徳授業を公開するのです。当然のことですが心配の声が上がっています。

そもそもですが、若手教員が育っていません。何か指導すれば、パワハラだの精神的に辛いだのと言ってすぐ休んでしまう現状です。授業を見られたくない、失敗が怖い、指摘されたくないなど、そんな若手がこの学校に複数いて、学校は混沌としています。（MS氏）

第三十七話 全校道徳

本校では月一回、全校道徳を行っています。12月は10日に行いました。

その日は「世界人権デー」。4日から10日までが人権週間で、その日が最終日でした。人権週間に絡めて12月の全校道徳にC〔公正、公平〕を充てて計画しました。

「人権の日」自体、なかなか意識されていませんし、人権週間そのものもポスターで目にする程度というのが実態のように思えます。全校道徳での取り組みを通して、人権を教師にも子どもにも保護者にも意識してもらうことは大切だと思っています。（TS）

第三十八話 道徳の研究発表会の役

先月、ある学校で教員が公開授業を行い、2年間の研究成果を発表する会に参加してきました。

何より授業者が笑顔で、1年生の子どもたちと明るく楽しい授業を展開していたのがよかったと思います。

その後の研究発表の内容はとても面白いと感じたのですが、一緒に聞いていた他の先生方は理解できたかなと感じました。

各道徳教育研究会の研究発表もそうですが、道徳の研究を続けてきた人には分かっても、これから道徳を勉強しようという人にはよく分からない、響かない、自分にはできないと感じてしまうような内容が多いと私自身も反省しています。

道徳の研究は「深めること」と「広めること」の両方が大事です。まず勤務校に、そして所属の区市に「広めること」にもっと力を入れていくべきだと思います。(AU)

第三十九話 ワークシート

ワークシートを使った道徳授業はよく行われていますが、私が懸念するのは書く箇所が2つ(以上)あるワークシートを使って行っている授業です。特に、教科書会社がそんなワークシートを提供しているものですから影響は大きく、困ったものだと思っています。

道徳授業は45分しかありません。教材提示後、それをもとに話し合いながら授業を進めて行くわけですが、書く活動が2回もあるとそれだけ話し合い活動の時間が減ることになります。

話し合い活動は発表活動とは違います。他の人の考えを聞いて物事を多面的・多角的に考える学習活動です。書く活動は物事を深く見つめたり、考えたりする時に有効ですが、時間がかかります。書く活動は1回が妥当ではないでしょうか。

第四十話 教師主導の授業からの脱却

本校では国語の「読むこと」を中心に、「価値ある対話を生かしたよい学習を目指して」研究を進めてきて、先日の発表会で全学級公開授業を行いました。

研究を始めたころ、授業のまとめは教師と一部の児童で行い、それを他の児童が共有するというのが当たり前のように行われていましたが、研究を進めるにつれて一人一人の児童が自らの思考を十分に働かせ、それを表現することが大切であることを学び取っていきました。そして、児童は次第に友達とひたすら対話し、自分の考えを広げたり、自分の考えに自信をもったりする学習ができるようになっていき、国語の学習は大きく変わっていきました。

始めの頃、この研究に不安を抱いていた教師たちでしたが、これまで国語の学習に後ろ向きだった児童が前のめりになって友達に考えを伝え合っている姿を目の当たりにし、「児童が授業のねらいに向かって友達とたくさん対話することができていれば、教師のまとめなどいらぬのだ」という確信をもつようになりました。

国語の授業を道徳の授業に置き換えて考えると、児童が自分の考えをもち、友達の考えに触れてさらに自分の考えを深めていくところは、同様のことが言えるのではないのでしょうか。

しかし、教師主導型の授業からの脱却が今提唱されています。これまでの道徳授業のやり方ではこれから求められる授業は難しいかもしれません。

児童が自ら思考を働かせ、友達と深く対話しながら、ねらいとする価値の自覚を深めていけるような道徳授業をつくりたいものです。(TU氏)

第四十一話 子どもの心の表れ

道徳ファイルの表紙や裏表紙に、気に入った道徳のお話の絵を描き込む子がいます。その子のファイルにたまったワークシートを読むととても嬉しい気持ちになります。

一人一人がどの教材からどんなことを学んだか、心にどんなことが残ったかなどが伝わってきた時は何とも言えない気持ちになります。

家で親に話した子、友達と話している子、付箋や折り目を付けている子など形は様々ですが、それを目にしたときに感じる心の温もりは何とも心地よいものです。(SI氏)

第四十七話 パソコン使用とグループでの話し合いの意図は？

道徳授業で他者から高い評価を得るには「パソコンの使用」と「グループでの話し合い」を必ず取り入れなければならないという考えが蔓延しています。

「ここでグループでの話し合いを取り入れた意図は何か?」、「ここでパソコンに文字を入力する活動を行わせたのはなぜか?」など疑問を感じる授業がとても多いです。

中心発問場面は、子ども同士がじっくり話し合い、道徳的価値の理解を深めさせたいところなのに、各々がパソコンに向かって考えを入力して交流するという学習活動でした。

子どもは一言も話さず、パソコンの入力に集中し、映し出される友達の考えを黙々と読んでいます。その15分間、子どもはずっとパソコン画面を見たままでした。

「お友達の考えと自分の考えを比べられましたか?」という教師の投げかけにも、子どもたちは画面から目を離しませんでした。

「話すことが苦手な子どもにとってこうした授業はとても有効です。一部の子どもの発言だけで進める不平等な授業からの脱却だと考えます。」

協議会で授業者は自信満々でした。

「話し手の表情からその思いを汲み取り、汲み取った思いをもとに自分を見つめるという活動がどれほど大切か。発

言しなくても、話し手の言葉や声の雰囲気から話し手の真意を感じ取ることも大事な学びですし、話し手はみんながどんな表情で聞いているか、その反応を見ながら話すということも大事な学習です。それが対話です。」と私が話をしても、授業者も他の参加者も皆「??」という表情でした。

教師と子どもたちが心を通わせながら思いを交流し合う、それが道徳性育成の重要な基盤ではないでしょうか。パソコンの画面からはそうしたものは生み出されないとします。(HH氏)

第四十八話 大人こそ道徳授業を求めている！

先日、練馬区立豊玉第二小学校の道徳授業地区公開講座で「大人と子供が話し合う道徳授業」を行いました。体育館で、大人と子供が4人グループを作り、そのグループでどんどん話し合いを進める授業です。話し合いの「約束(ルール)」を5つ示しました。

①この授業では、大人・子供の区別はなく、対等の同じ人間として話し合うこと、②話したくなければ無理に話さなくてもよいこと、③聞く時は、話し手の顔を見て、うなずきながら聞くこと、④他の人の発言を批判したり、否定したりしないこと、⑤授業後はグループで話し合ったことを二度と口にしないこと。

内容項目はB[友情、信頼]で、使用教材は植木洋(墨田区立両国小学校)作「[アトリエの思い出](#)」でした。

授業後に参加者に感想を書いてももらいましたが、とりわけ[大人の感想](#)にシビれました。実社会で懸命に生きる日々の体験と葛藤がにじみ出た一言一言が心に刺さります。どうぞご覧ください。

道徳授業地区公開講座の趣旨を踏まえると、理想的には校長自身が各校でこのような授業を行う、あるいは各学級担任が各学級でこのような授業を行うことの方がずっと目的にかなうことになるのですが…。いずれにしても、見ず知らずの外部講師より、子供が日頃お世話になっている自分たちの先生が行う授業の方がよいに決まっています。(後藤忠)

第四十九話 新わくわく道徳授業研修会参加者の感想が熱い！

「新わくわく道徳授業研修会」は、日頃道徳授業を学ぶ機会がない先生、あるいは道徳授業ビギナーの先生に向けて任意で行っている研修会です。受講料はいただいておりません。(ただし、資料印刷等の雑費を200円いただいています。)

先日、立川市立第一小学校で行った研修会に参加した先生方の[感想](#)をここにまとめましたので、是非ご覧ください。「やってよかった！」と思う感想ばかりで、とても嬉しく幸せな気持ちになりました。校長先生方や大学の先生もお見えになり、とても活気に満ちた研修会でした。

これを励みに、次年度もぼちぼち続けていこうと思っています。どうぞよろしくお願ひします。(後藤忠)